

同じ形の動詞をどう区別するか

著作者：luuffie（放課後大学プロジェクト 提案者）

1

日本語動詞の習得というテーマを考えるうえで、「同じ形をした動詞をどのようにカウントするか」という問題がありうると思います。

たとえば「大声で叫ぶ」という表現と、「心の叫び」という表現とで、「叫ぶ」の意味は同じと捉えた方が良いでしょうか、違うと捉えた方が良いでしょうか。ようするに「叫ぶ」という動詞には二通りの用法がある多義語である」と捉えた方がいいのか、それとも「一通りの用法が原則としてあって、それを踏まえたうえでの特殊用法がある」と捉えた方がいいのか、ということです。

あるいは、「ボールを掴む」というときの「掴む」と、「勝利を掴む」とか「大意を掴む」というときの「掴む」とは、どのような関係にあると捉えると良いでしょうか。「掴む」が多義語なのでしょう。それとも根本は一つであり特殊用法が時折ある、と捉えた方が良いでしょうか。

あるいは、「文章を読む」というときの「読む」と、「気配を読む」とか「行間を読む」といったときの「読む」との関係はどうなのでしょう。

さらには「網棚の上の鞆を取る」と、「連絡を取る」や、さらには、「写真を撮る」や「出前をとる」や「栄養を摂る」や「獲物を獲る」や…の関係はどのようなものなのでしょう。そもそもこれらを「同じ形をした動詞」と扱って良いのかすら、はっきりしません。

あらかじめ予告しておけば、こういった事柄は簡単には答えは出ないと思います。ただ、そういつているだけだと、誰かが答と称するものを勝手に押しつけてくるので、それへの対処はあらかじめ、少し考えておく必要があると思います。

たとえば、言語学はフランス語や英語を対象にして生まれた理論が多いという気がします。それだけならいいのですが、その理論を日本語に適用するときにと遠慮がない学者というのがいます。たとえば「〇〇はメタファーである」とだけ断定し、何もそれ以上の正当化をしない学者というのがときおりいたりします。「〇〇」がメタファーであることは不動の前提であり、それを基にして「メタファーという現象がいかんして成立しているか」「メタファーという現象がいかんして普遍的か」などを解明したり主張したりしようとするのです。しかしあいにくそもそも出発点の「〇〇はメタファーである」という断定が、読者には納得がいけないことが間々あるのです。なぜメタファーだと言っているのか、そしてメタファー認定することにはどんな目的やメリットがあるのかが、わからないのです。英語やフランス語では「何がメタファーか」は自明なのかもしれませんが、メタファーについての理論を樹立した人は日本語を対象にして考察したわけではないので、そこは一からの出直しになるはずなのです。ですが、日本人の言語学者などの中には、そこを出直さな

いで、勝手に決めつける手合いがいるのです。これは困ります。というか、その主張に耳を貸す必要はあまり無いと思います。遠慮なく無視します。

そういうわけで、たとえば「勝利を掴む」の「掴む」はメタファーである」とかあまり性急に決めつけないで、議論とか問題の整理とかを進めたいと思います。メタファーに限らず、こういった概念装置のようなものは、不必要なのに用いるとかえって混乱しますし、必要な場合でも、それは日本語の場合「一からの適用」になることが多いので、ゆっくり慎重に決めるにこしたことは無いのです。

2

以前私が少し述べたように、日本語の動詞のなかには、「不特定動作動詞」とでも呼びうるような動詞群があります。言語行為に関する典型的な動詞群はまるっきりの不特定ではないので別扱いにするとして、それ以外に「演技する」「まねする」はもとより、「練習する」「調べる」「扱う」「対処する」など、「何らかの動作を伴うことはまず間違いないけど、特定の外観によって特徴づけられるような身体動作をもたない動詞」というものがいろいろあります。

そうすると、「勝利を掴む」の「掴む」もその一類型のように見えてきます。少なくとも「勝利を掴む」ということに必ず伴うような「身体動作」というのはちょっと有りそうにありません。とりわけ「何に関する勝利なのか」が決まらなないと、動作のタイプも決めようがない感じです。そして、およそどんなタイプの「勝利」であっても使えそうな言い回しなのです。「勝利を掴むという身体動作」は不特定である、と断定して良さそうです。その意味で、「ボールを掴む」などと、動作の種類も、動作に基づく分類も違っていることがわかります。もし動作の種類で動詞を別扱いにするのであれば、「ボールを掴む」の「掴む」と、「勝利を掴む」の「掴む」とは「別の動詞」である、と言って良いほどなのです。

ちなみにこれらと「大意を掴む」「内容を掴む」などの「掴む」もまた異なっています。この「掴む」のようなタイプの動詞を私は以前「内面動詞」という仮名で呼んでおきました。多少誤解を与える名前ですが、これは「内面」というものが存在していてそこで起こっていることを表わす動詞なのではなく、「内面というものが存在している」ことにしてしまい、そこで起こっていることにしてしまう、という動詞なのです。この動詞の本質は「動作そのものは表わさない」ということです。「大意を掴む」「内容を掴む」ために、人はいろいろな動作をするでしょう。眼球運動をしたり、ページをめくったり、図やメモをかいてみたりすると思います。ですが、これらは「大意を掴むため」「内容を掴むため」の動作であり、その動作そのものが「大意を掴む」「内容を掴む」という意味内容であるわけではありません。「考える」の場合でも同じです。「考えるため」に必要な・有効な動作はいろいろあるでしょうが、その動作そのものは「考える」とは別ものです。

さて、そうすると、「掴む」という動詞の用法には、大別して三種類の区別すべきものがあることがわかりました。「ボールを掴む」というときの「掴む」は「特定動作動詞」、そ

れに対して「勝利を掴む」というときの「掴む」は「不特定動作動詞」、そして「大意を掴む」というときの「掴む」は「内面動詞」というわけです。この分類は「動詞の意味内容と動作との関係はどうなっているか」という観点に基づくものです。

3

「勝利を掴む」と「行間を読む」とでは、一見似ているように思えます。しかし、なかなかこの二つのあいだには微妙な差があって、無視できないものだと私は思います。「勝利を掴む」の「掴む」は、ある種の「多義語」だと認定して良いような気がします。少なくとも日本語動詞を学習する側からすると、動作の分類で完全に別物になる三つの用法は区別した方が効率も良く、理解も正しいものになると思います。それに対して、「行間を読む」という表現と、たとえば「文字を読む」との間には、「たんなる多義語」とは違った関係が成立しているように思うのです。それを述べます。

まず、「勝利」と「掴む」の関係を考えてみます。「特定動作としての掴む」であれば、「勝利」という対象と「(動作として) 掴む」こととの間には「可能でも不可能でもなく無関係であるという関係」が成立すると思います。勝利というのは、身体動作として掴むことができる対象でもないし、掴むことができない対象でもない、のです。これは「円周率を食べる」((c)土屋賢二)という表現と似ています。「円周率」と「食べる」との間には、可能という関係も、不可能という関係もありません。ただの無関係です。土屋自身が微妙に説明を間違えている箇所もありますが、念を押しておきましょう。円周率というのは、食べることが可能な対象でもなければ、食べることが不可能な対象でもありません。「円周率」と「食べる」とは言わば「無関係という関係」にあるのであり、「円周率」と「食べる」とを「を」などの助詞で結合しても、たんに無意味な文が産出されるだけです。「掴む」を身体動作としての意味内容に限定した場合も同じことが生じます。「勝利を掴む」…それは理解できない、たんなる無意味な文です。勝利というのは掴むことができる対象でもなければ、掴むことができない対象でもないのです。「太陽を掴む」とか「銀河系を掴む」とか「酸素を掴む」などとは違うのです。そこで、身体動作としてではない意味内容を想定して、はじめて理解可能な表現としての位置づけを得ることになります。「円周率を食べる」／「石を食べる」(後述)という事例については以下の著書にかなり負っています。土屋賢二『あたらしい哲学入門 なぜ人間は八本足か?』文藝春秋社,2011)

ところが、「行間を読む」とか「空気を読む」「気配を読む」といった「読む」は、もう少し違った見方が可能に思います。「読む」という単語にはたとえば「漱石を読む」という言い方が存在します。これは「漱石の作品を読む」という内容を伝えることのできる、慣用的な省略表現・近似表現です。「読む」という動詞がこういう表現が可能であることを念頭に置いた場合、「行間を読む」という表現も「文字通りの行間」でなくても良い可能性が出てきます。そのうえで考えてみましょう。「行間を読む」ためにはまず「行間を見る」ことが必要です。そうすると「行間に“読む対象が無い”ことを見る」ということが成立し

ています。「空気」の場合はもう少し微妙でしょう。「空気」は「見えない」という言い方をした方が良く思うからです。しかしその場合であっても「空気に何も読む対象が無いということを見る」ことは可能です。いずれにせよ、「行間」や「空気」は「読む」という動詞と「無関係という関係」にあるわけではありません。それらはいずれも「読むことが不可能」という関係にあります。ですから「円周率を食べる」よりは「石を食べる」に近く、「勝利を（動作として）掴む」よりは「太陽を掴む」に近い表現です。「行間を読め」とか「空気を読め」という命令文は、ですからあからさまに不可能なことを命じることによって、受け手を戸惑わせたり、考えさえ、あるいは何かを促すことをしようとしている表現なのです。その点で、「勝利を掴む」とは別の在り方をした表現であるように思えるのです。

そうすると、「ボールを掴む」／「勝利を掴む」の間にあるような関係と、「文章を読む」／「行間を読む」の間にあるような関係とは、違っているのではないかと推測できます。「ボールを掴む」／「勝利を掴む」の場合は、「たんなる多義語」として処理することが有効でもあり本質的でもあるように思えました。それに対して、「文章を読む」／「行間を読む」の場合、前者の用法が前提となって、後者の用法が転用とか寄生的な用法として存在している、と見なしたくなる気がします。

4

それとは少し違う話題ですが、たとえば「心の叫び」というときの「叫ぶ」と、「恐怖のあまり叫んだ」というときの「叫ぶ」とはどのような関係にあるのでしょうか。「心の叫び」自体も、さらに異なったように思える用法があります。たとえば「心の叫び」というのが「心の中で叫んだ」というふうに言いたいときに使われることもありますし、何かの文章で「被害者の心の叫び」と題して文章が続けば、それは「心の中の叫び」ではなく、文字化されて文章として掲載されたものを指します。これらはどのような関係にあるのでしょうか。「叫ぶ」という語が「多義的」である、という関係なののでしょうか。それとも、ある用法は別の用法を前提していて、その転用や寄生的な用法だと言えるのでしょうか。

「心の叫び」は、「心の」を取り去った単なる「叫び」という表現では表わせない、というのがポイントではないかと思います。ただ単に「叫ぶ」「叫び」と書いたときに、それが「心の中で叫ぶ」「心の中の叫び」を意味することはまず無いと思います。あらかじめ特定の文脈が用意されていたりする必要があるでしょう。要するに、「心の叫び」は「心」＋「の」＋「叫び」というよりは、「心の叫び」という一語である、と見た方が良く思うところがあるのです。「心の叫び」で「心の中」だけでなく、文字化したものに使うことも可能なもの、「心の叫び」で一語のようなものだからです。その「一語化」した用法のさらなる転用のような用法なのだと思います。

「心の中で話しかける」とか「頭の中で会話する」などもまあ同様です。これらも、「心の中で」「頭の中で」という語と結合したときにだけ特有の用法を持つような、慣用的表現

に近いものだと思った方がいいのです。たんなる「話しかける」で、事前の文脈もなければ、これが「心の中で話しかける」ことを意味することはまずできません。すなわち、これらのような表現が可能だからといって、「話しかける」や「会話する」が「内面動詞である」などと考える必要もなければ、「多義語」であると考えする必要もありません。これらは、やはり「叫ぶ」「話しかける」「会話する」などの「標準的用法」を前提にした「転用」だと思った方がいいと思います。そこに居ない人（Aさんとします）であることが事前にわかっている場合に、「Aさんに話しかけた」などと表現すれば、それが「心の中」であることがわかる、といったような感じなのです。それすら絶対ではありませんが（その場に居ない人に対して声を出して「話しかけ」ることも可能なので）、そういう用法ならある程度理解はでき不自然ではなくなります。ともあれ、文脈や補足情報がないまま「話しかける」という語を単独で使って、同じような意味内容を表現することはできません。「話しかける」はそういう意味合いでの多義語ではないのです。

5

「網棚の上の鞆を取る」と、「連絡を取る」や、さらには、「写真を撮る」や「出前をとる」や「栄養を摂る」や「獲物を獲る」や…の関係はどのようなものでしょうか。

これらは皆「とる」という同じ単語が、多義的に使われている、というように思います。同じ単語だと見なしたくなる理由は、「とった結果」が「同じような結果」だからというのがあります。「連絡を取る」を除けば、皆「とった物が手元に残る」という点で共通しています。で、これらが「同じ単語」でありながら、多義語・多義的な用法として区別した方がいいように思える理由は「必要とされる動作」が異なっているから、です。

ところで、この中で「連絡を取る」だけは、少々異質な感じを受けます。動詞の対象が物的な存在者ではありませんし、「とった物が手元に残る」という共通性もあまり感じられません。こういうタイプの言い回しの場合、「連絡を取る」という一語として、別扱いをした方がいいようにも思えてきます。

おそらく「連絡を取る」が別扱いになってしまうのは、これが「内面動詞」と共通する一面をもつことと関係あります。

「読む」という動詞は、たんなる「読むときのような動作」だけでは完結できない動詞でした。「読む」ことの成立には、「読んだときのような動作や姿勢」以上の結果が求められるのです。反対にたとえば「待つ」という動詞は、「待つときのような内面」の状態や条件だけを満たしていればいいわけでもなく、「待つ」ときのような動作とか姿勢や体勢も少し要求されます。「待つ相手や対象」が出現した場合に、それなりに対応できるような状態が、心理や内面だけでなく、身体の動作や姿勢のレベルでも要求されるからです。「待つ」ということと相反するような姿勢や体勢である場合、「待つ」という動詞の適用がしにくくなるわけです。

「連絡を取る」というのも、動作だけで定義・規定できるものではないでしょう。「Aさ

んが B さんに連絡をとった」という場合、A さんや B さんはそのことを多少は知っていないといけないからです。つまり「知っている」とか「認識する」とか、そういった「内面」の状態も必要とされる動詞なのです。電話で連絡をとったのなら、電話の着信音に「気づく」とか、「相手のメッセージを理解する」とか、そういった「内面」の状態を含むような形で成立するのです。それを「内面」とか「頭の中」「心の中」などと表現するかどうか、とかそれは二の次です。ともあれ、そういう仕方で表現されることのあるような、そういう状態を成立のために必要とする動詞なのです。他の「とる」がまがりなりにもその対象が「物的」なものであったのに対して、「連絡を取る」は人間（に似た）相手に行なう動詞であり、行為・活動です。「連絡」という名詞も、つまるところ、人間と人間の間で成立するような出来事やあり方を指していると言えるわけです。その点が、他の「とる」との違いを感じさせ、別の語として扱った方が良くように思わせる理由ではないかと思います。

6

この文章は、日本語動詞の学習・習得ということを実行する際に、必ず問題になりそうな点をいくつか挙げて、考察してみました。こういった事柄は、すっぱりと割り切れるような形で決着がつくことは、あまりないと思います。例外や境界例なども必ず出てくるでしょうし、考慮に入れていなかった事例も今後出てくるかもしれません。そのうえで、現在のほとんど「無策」の状態から、少しは脱することのために役立てばと思います。

(初出：2013年1月21日)